
LAST DAY

ユウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LAST DAY

【Nコード】

N0876A

【作者名】

ユウキ

【あらすじ】

日本壊滅生き残った男はある組織のために「リストハンター」と戦うことを余儀なくされた…

第一幕：ある男

「あ…うつ…」

真新しいビル

の一室に一人の男が鉄パイプのベッドに横になっていた

「こっ…ここは？なんでこんなところで…確かあの時…」

・二日前

この男は大事そうに蒼い玉を手に、荒れ果てた町を急ぎ足で歩いていた

「なんだよこれっ…」

男は今自分がおかれた状況

を必死で理解しようとしていた。

「なんなんだよあの光っ…なんで町がこんなことに」

その光は一瞬にして全てをかき消した 人も 町も 全て

「クソッ、誰もいないのかよっ！」

・ガサッ・

「！ 誰かいるのか」

男は足をとめた

・ガサガサッ・

その音の主は焼け焦げた瓦礫の下からはいずる様に ゆっくり ゆっくり と 姿を現した

「なっ…」

男は言葉を失った

・フシュウウウウ・

口から煙をはきだしながら現れたそれは人間ではなかった 死神の

様に漆黒のロープ

をまとい 手は大きな力ギヅメになっていて 皮膚は腐って剥がれ落ちていた

「うわあああつ」

人間ではないそれ

は男に飛びかかってきた（殺されるっ）

男が目を閉じたその時

バラララララララッ

- ヒイギヤアアアッ -

人間ではないそれは大きな音と共に後ろへ吹っ飛んだ

「あんた歩ける!？」

轟音と共に現れた重装備した女は男に聞いた

「エッ… あっあんたは？」

「それは後、いいから逃げるの！アイツはあんな程度じゃ死なない

…」

「なんなんだよあれ」

「それも後っ！」

女は男と共に闇に消えていった

二人はあれから逃げきって瓦礫の山に身を隠していた

「なあ、あんた何者なんだ？それにあの化け物…」

「あれは私たちの間ではリストハンターって呼ばれてる、あいつらは人間を主食にしている」

「なんだって？」

「あなたに1つ聞きたいことがあるの」

「？」

「あなた、あの光をみた？」

「えっ…ああ見たよ、それが？」

「ハア…」

「なんだよ」

「ゴメンねあなたに恨みはないけど…」

女はそういうと男を殴り倒した

「グッ」

男は倒れた

- いま感染者を一人捕獲しました -
に連れてこい -

- 分かった 本部
薄れ行く意識のなかで男は聞いた

「そうか…殴られて…」

- シュイン -

部屋のドアが開いた

「だっ、誰だ！」

- フシュウウウウ -

驚いた男がみたものはあの忌々しい化け物だった

「またかよっ」

ハンターは男にカギツメをふりかざし飛び付いてきた　しかしあの時とは違った　男はカギツメをサツとかわし　ハンターの横っ腹に蹴りを一発　ハンターはうめき声をあげ　壁に突っ込んだ

「あ…いま俺？」

「シュイン」

ドアが開き　振り返った男の目にうつったものは　あの時の女だった

「あっ、アンタ…」

「早くこっちへ」

女は男の手をつかみ　逃げ去った

第一幕：ある男（後書き）

初めまして ユウキです 初小説書きで物足りない部分もあります
がよろしく願いします m (_ _) m

第二幕：二丁拳銃

「なんでこんなことになった!!」

大声で部下に叫んでいる男がいたビルの持ち主、田邨 悠 だ
「分かりません、原因を調査中です」

「さつさとしろ!! あいつらが来るぞ! 原因が分かったら全員待避だ、そのあとにここを爆破するっ! あれが暴発したことがばれたら私の権威に関わる」

「分かりました」

(クソッ、あと少しのところでこんなことに) ・ シュイン ・

「感染者を連れてきました」

ハンターから逃げきったあの男と女だった

「よし、ご苦労」

男はなにがなんだか分からなかった

ハンターの攻撃を

かわしただけでなく 腹に一発 なんでそんな芸当が出来るのか
「俺に何をした!!」

その問掛けに悠は静かに答えた

「君はあの光を見て感染した」

「感染したらどうなる?」

「ハンターになる、しかし、我々がそれを食い止めた」

「じゃあ俺は助かるのか?」

「ああ、しかし後遺症のせい... いや、おかげと言っべきか、君の筋肉、知能は普通の人の七倍になった」

「だから、あんなことが…」

「君は、この悪夢を止める事が出来る唯一の人間だ」

「そんなかってな…お前らの引き起こした事だろう」

「そうだ、しかし我々にはなにも出来ないんだ」

「ぐ、軍隊でも自衛隊でも呼べばいいじゃないか」

「いない…」顔をうつ伏せ悠は答えた

「いない？いないってどうゆうことだ!？」

「日本の人々は皆アレ変わっているだろうな」

「あの光のせいだな？じゃあ聞くがなぜ俺は助かった？」

「わからないが…おそらく君の持っていた玉のおかげだろう」

「母さんの…でもなんで」

男が聞くと同時に警報ブザーがなり響いた

「どうした！」

悠が聞くと部下が

「ハンターが来ます！数は…約30！」

「絶望てきだな…さあ、どうするたよりは君だけだ」

悠は男に問掛けた

「やるよ…やりやあいんだろ！！でもどうやって倒すんだ！？あの女の持ってたマシンガンでも倒せなかったんだぞ」

男の問掛けに悠は答えた

「アイツラを倒せる唯一の武器がある、こっちだ」

悠は鍵穴の二つあいた扉にキーを2つさし 同時に回した すると扉はゆっくりと音を立て開いた

「さあ、早く」

男は悠の後を追い掛けた

「奴らを倒せる唯一の武器がこれだ」

悠は黒の二丁の拳銃を差し出した

「あいつらの弱点とかは？」

「その銃で撃てば全身弱点だ、さあ早く時間がない」

そう言うと男はハンターのうごめくだろう廊下へ飛び出していった
「頼んだぞ、我々の逃げる時間を作ってくれ」

悠は不適な笑みをこぼした…

第三幕：真価

建物の中に侵入して来たハンターを殲滅すべく、廊下を走っていた。

（どこにいる…）

一方、指令室

にいる悠とその部下はアレが何故、暴発したのかその原因調査を、急ピッチで進めていた。

「急げ！」（あいつが、どれだけ持つかわからん。

ハンター共を殲滅してくれるとありがたいがまあ、むりだろう）

「1つたりとも情報は残すな、調べ終わったデータは消去しろ」

「ですが…消去してしまうといままでの苦勞が…」

「かまわん、世間にながれるのよりマシだ」

（そう…今はこれでいい）

男は二階

の大広間にいた

「いないじゃねえかよ」

大広間を後にしようとした時、

天井の黒い染みに気付いた、その染みは1つ 2つと数が増えていき、その1つからハンターがスライムのように浮き出てきた、それを合図にほかの染みからもハンターが浮き出てきた

「ぞろぞろとっ！！」

男は拳銃を上にかまえ

弾をハンターに打ちこんだ、するとハンターはいとも簡単に水のよ

うに破裂した。

「歯応えがねえなあっ!!!」

「ナラ、ワタシガアイテヲシテヤロウカ」

いつの間にか男の後ろに怪物がいた、それはハンターとは違った。

男はサッと振り返り銃をかまえた、

が、それはそこにはいなかった。

「オソイナアツ」

「!」

(速いぞ、この化け物)

思うと同時に男は背中に衝撃を受け壁に吹っ飛んだ。

「ハハハハハアツ、ヨワイナア、モウオワリカ?」

男

は黙っていた

「シンダノカ?」

化け物が男に近

寄ると同時に銃声が轟いた

「ガアアアツ!!!!」

銃弾は頭のと真ん中を

撃ち抜いていた。

「なんだよ、喋る化け物だから強いかなあ、と思ったが、期待ハズレか」

化け物はうめきながら水と化していった。

「さあ、帰るか」

男は来た道を引き

返した。

その光景を監視カメラで見ていた悠

は、驚きを隠せなかった

(こ、こいつは使えるぞ、まさかここまでとはなあ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876a/>

LAST DAY

2010年10月22日00時03分発行